



完璧な虫のかたちに春の蠅
かたまつて念仏唱へてゐる土筆
根の国の使者とし蛇の出でにけり
ゆつくりと沖の巨船や卒業歌
風光る小島岬を艦いんふね
春曉の水平線や妻の忌來
櫟咲き何かに秀でたく焦る
春の月寄生木よつぎつぎと上げにけり
うりずんやゆるやかに透く船の道
深海のこだま潜むや山ざくら
三・一一風船に息思ひつきり
連なりて流るる泡や夕永し
淡雪や魂運び来し貝もあらむ
雪解のびしよ濡れの町きらきらす

*

芽吹く木を称ふる深き根の力
己が炎の鎮め難きよ野火叩く
春の穂高岳獣の息の深きかな
末黒野や大地の素顔あどけなき
やせ衰ふる狸家々まはりをり
パンジーや貌に哲学あるごとく
徘徊の父と鶏ねぎぼうず
行く春の泥鰌のおなら藻にのぼる
火炙の刑を頂き焼栄螺
夜桜に負けないように厚化粧
急カーブ手は春キャベツ押えつけ
ふらここを下りて少女は奪衣婆に
難民のごとき汚染土花薺
海底に流れをるらん卒業歌
叩きつけ旨み閉ぢ込む味噌造り
我が顔を伸びきらせたり石鹼玉

栗原利代子
矢島 惠
佐藤 健
川村五子
眞榮城いさを
鈴木湖愁
中岡草人
関 千賀子
池間キヨ子
原田宏子
堀川節子
木幡ティ
小伊藤美保子
滝澤あや

平山広子
高橋洋子
吉澤 清
中澤良子
岡本哲彦
瀬戸柚月
志田 成
名取法子
堀内清瀬
島田篤夫
市原啓子
佐藤きく
鈴木臣和
小原真理子
小野文雄
名取大輔

岳俳句・拓くことば 六月

(454)

宮坂 静生

はじめに。詠いたい句材があるうちは幸せ。気になる句材からわずかでも珍しさを発見するように打ち込み、のめり込むように詠うこと。粘りに粘って詠う。

念仏唱へてゐる土筆―自然のおかしさ

かたまつて念仏唱へてゐる土筆 矢島 惠

托鉢僧の集団のように、ぞくぞく群立の土筆集団を「念仏唱へてゐる」と見立てた写真の眼と想念との融合の仕方が巧い。どこか類想感を伴うのは、やさしい表現だけに、ありそうな気がする。それだけ、身近な発想で十分おもしろいといふべきであろう。

根の国の使者とし蛇の出でにけり 佐藤 健

蛇を死者の国の使者との見方に共感する。冬眠中に根の国との交信があるのではないか。あるいは根の国は蛇の冬眠するあたりなのかも知れない。蛇の形、動きは只者ではない。それくらい utility を担っているとの想像はごく自然だ。

ゆつくりと沖の巨船や卒業歌 川村 五子

辺に住む者には親しいのではないか。

櫟咲き何かに秀でたく焦る 中岡 草人

どんぐりの花は目立たない。五月に黄褐色の毛虫のような花穂が下る。私が大きくなった安曇野堀金村の母の実家には屋敷に櫟の大木が十本近くあった。地味な花穂を見て私は、櫟はこんな花を付けうれしだろうかと花の宿命を思ったものだ。いま草人さんの句を見て、少年の日に櫟の気持を付度したことをふと思ひ出した。生涯、みんな「何かに秀でたく」願ひながら、終ってしまふ。鍼灸師のプロ草人さんの氣持に触れ、私は感動した。「焦る」の語が迫るようだ。

今月の秀句

完璧な虫のかたちに春の蠅 栗原利代子

これが完璧だという基準なり見本があるわけではない。小虫でありながら精密な造作をしている点に感心したもの。生れ立ての春の蠅への讃歌。嫌なものとも価値観を加えないで、へよくできてゐる」と感心しているのは、虫好きの作者の博愛精神。広い見方だ。人間中心でなく、生きものを等しく愛している。なめくじ観察に力を入れた作者の近詠。

卒業歌と置いた下句で俄然一句は遙かな時空を呼び入れた。学窓を巣立つ。卒業歌には来し方への追懐と同時に未来への展望と讃歌が籠められている。添えられた沖の光景もいい。みんなが幸せとはいかなくとも、卒業歌を唱うときの思ひは長い生涯の大きな節目。一句は昔日のそんな日を回想したのであるが、暮らしの骨格や秩序を大事にしたい作者の思ひから発想されたものであろう。

風光る小島岬を艦 眞榮城いさを

艦の字にはいくさぶねが本義にある。早春の平和な時期だけに、艦の一字が光る。沖縄宮古島在住の長老なので、沖縄の来し方を思い、さらに現実の東シナ海をめぐる戦の気配を踏まえた一句と読める。風景句でありながら、作者の思ひが伝わる佳句と思う。

春曉の水平線や妻の忌来 鈴木 湖愁

春の夜明けに海の彼方水平線を見て、妻の忌日を思った。もとより、地球の自転による歳月の循環を想像するといった科学的な句ではない。が、妻のすむ世が海の向うにあるのではないかと沖縄人が信仰するニライ・カナイの浄土感、海

春の月寄生木つぎつぎと上げにけり 関 千賀子

春の明るい大きなお月さま。その前に、櫟などが掲げる寄生木の毬。気が付けばつぎつぎと見えてくる。春月の昇る早さにしたがって、寄生木が数をふやす。動態表現がおもしろい。

うりずんやゆるやかに透く船の道 池間キヨ子

沖縄の初夏、麦の穂の出る頃、四月から五月をいう。船の通った水脈の透明感を詠い、古来、沖縄の海の道こそ本土へのすべての道の原点であることまで連想させるようだ。

深海のこだま潜むや山ざくら 原田 宏子

山ざくらに深海のこだまが潜んでいるとの着想は、東日本大震災による津波犠牲者などを念頭に書いたものであろう。東北の山ざくらばかりでなく、古くから日本列島に咲き続ける山ざくらがそんな霊的存在だとの見方に注目した。

三・一一風船に息思ひつきり 堀川 節子

三・一一の日が来ると各地から東北地域の犠牲者を念頭に祈りの気持をこめた風船が空高く飛ばされる。せめて、ささやかなこんなことでもという連帯の行為である。些事への意気ごみによく気持がこもっている。

連なりて流るる泡や夕永し 木幡 テイ

拓くいふば ②⑨ 自句寸言(13)「父となる」

遠つばめ岬「靖国の家」ばかり 昭和45年

「鷹」(昭和四十五年十月号)所載。「能登」四句出る。「青いちじく齡あかるき旅の刻」「盆近き老婆いちづに岬口」「流人悲話夜は磯のぼる子持蟹」「夜の渚の子持蟹」・『山開』が同時作。初めて能登半島を巡った。松本県ヶ丘高校の国語科教官の研修旅行で、曾々木、真浦の海で泳いだ記憶がある。三十三歳。若かった。禄剛埼から珠洲岬の家の戸口に戦時中のままに「靖国の家」の表札が掛かっていた。衝撃が走った。帰らない青年もいたに違いない。この年「鷹」同人になる。『山開』所収。

さざなみを膝に展げて棗壳 昭和45年

飛驒高山詠。句集に収録。「旅二日尾花のごとく睡りけり」「朝市の地に置く秤雲の冷」が同時作。後の二句は「龍膽」(二四四号)に載る。十月十七日、十八日、親しかった鈴木脩(この年から木曾西高教頭)、渡邊寿郎両先生と平湯を経由し、高山へ。冬頭屋に投宿。おかみのもてなしに感激。住素娥さんの世話になり、宮川朝市を散策。丹生川村からの老婆の棗壳が珍しかった。霧湿りの早朝の清爽感を詠う。いい旅だった。『山開』所収。

沢蟹につかのま灯す冬祭 昭和46年

「龍膽」(一四六号)所載。「雪に置く独活やはらかし妹嫁ぐ」(妹晴子)が同じ頃の作。塩尻小曾部の友人青柳哲夫宅へ高校時代に招かれ、父親が寒中、沢蟹を獲って炒てくだった印象が強烈だった。祭の日だった。哲夫の高校一年時の創作「或る高校生の手記」(『校友』第三号)は父と兄との暗闘を描き印象に残る。『山開』所収。

青櫟文鎮ほどに子を愛す 昭和46年

「龍膽」(一四九号)所載。「文鎮ほどに」が問題になった。愛し方が足りないという。薄情だとも。確かに溺愛はしなかった。いつも気にしながら、妻任せ。子の成長期に教師稼業に忙殺され、暮らしがきびしかった。団栗の木を仰ぐたびに思ひ出す句。『山開』所収。

父となる枯蠟螂を火に入れて 昭和46年

「鷹」(昭和四十七年三月号)所載。「冬の鳩みんなたてせて子に会ひに」が同時作。長男学は四十三年五月十八日、次男等は四十四年十月二十一日、長女淳子は四十六年十二月二十八日生まれ。次男誕生時詠。国際反戦デーの日で、全国大荒れ。激浪を乗り越え生きて行かねばと名付けた。かつて僕に用意された名とか。『山開』所収。

ひそやかな一句。なにか祈りをこめたものか。南相馬在住の作者。「夕永し」の着眼として連なり流れる泡との一点に注目した。「方丈記」の冒頭を思いながら。

淡雪や魂運び来し貝もあらむ 小伊藤美保子

亡き人たちの魂を海底から陸の人々へ春先の貝が運んでくる。汀の貝がそんな役を担っていたとの氣付きがやさしい。

雪解のびしよ濡れの町きらきらす 滝澤 あや

奥信濃の雪解。町中が「びしよ濡れ」。そのときが一番町がかがやくとき。日の光も強くなる。一気に春が訪れる。雪国の春を迎えるよろこびは、忍従暮しの雪国人でないとなかなか実感できないものだ。雪解のさまには思いきり俗ない方をしたくなる。雪へのうって返しのように。

鎮め難きおのれの炎とは―野火を叩く力

己が炎の鎮め難きよ野火叩く 高橋 洋子

「己が炎」とはなにか。自分の内なる情念、欲望のかたまりを指したのか。折から春先の畦焼、山焼などの野火の類焼を叩き消す。そのときに連想するのが自分の内なる情念のはげしさ。野火は叩けても自己の欲情は抑えることができないという。内面の情感の激しさに注目した。

春の穂高岳獣の息の深きかな 吉澤 清

この「獣」は獣一般なのか、特定の熊とか猪などを指すのであろうか。いまだ残雪深い穂高岳を遙かにし、私は冬眠から覚めない熊などを想像した。息遣いの深さではなく、長い冬眠状態を「息の深き」と読んだのである。あるいは、散歩途上の犬の息遣いなどからの着想と思われなくてもない。切れが見事。春の穂高岳を毎日仰いでいると、山の崇高さと同時に獣の息遣いに通う自然の野性のはげしさが身にしみるのである。

末黒野や大地の素顔あどけなき 中澤 良子

野火後の黒々とした大地を素顔と見て、「あどけない」と捉えた思惟に共感した。毎年、春はそこから始まる。原初への探求からはじまり、自然の摂理を究めようとする作者のゆるぎない信念をよしとして見守り、一つ一つの発見を期待したい。

やせ衰ふる狸家々まはり 岡本 哲彦

寓意をこめたような冬の狸のさまである。餌を托鉢しているものか。雪国では狸も住み難くなったものか。自然体系が崩れ、狸の生態系に異変が起きてきたものか。ショックングな光景が提示され、はっと驚いた。妙高山系の変貌を伝えていただきたい。自然界の一部としての人間世界の異変が自然

をだめになっている点への告発が俳人のつとめ。

パンジーや貌に哲学あるごとく 瀬戸 柚月

人生経験が顔に表われるとはしばしばいわれる。パンジーから容貌を連想するのはごく自然。「哲学」という観念語を用いて、人生経験から抽出される生き方や信念を指したものの。コンパクトに凝縮したい方であるが、縷縷といわないで、「哲学」の隻語で、話せば長いことをまとめたのが才人と思わせる。パンジーから連想する貌はもっと軽いイメージであるが、「哲学」と結びつけた違和感がおもしろい。

徘徊の父と鶏ねぎぼうず 志田 成

鄙の父。自宅周辺を徘徊する。それ程遠くまで徘徊するのではないが、家人の隙をみてとび出す老父を心配するという、いつも紐付きのような不安事が加わった。鶏も葱坊主も同じ次元の自然物。人間よりも葱坊主や鶏に近い存在になりつゝある父から目が離せない不安を淡々と詠ったのがよい。

行く春の泥鰌のおなら藻にのぼる 名取 法子

「や」切れがいゝか。句材がおかしい。泥鰌も餌を消化するにはおならもしよう。おならの泡がつつと昇って水藻にもるといふ。万物の青春、よき季節春も過ぎてゆく。余裕派。

火炙の刑を頂き焼栄螺 堀内 清瀬

地獄の奪衣婆に転じ、歌舞伎を見ような荒技がおもしろい。

難民のごとき汚染土花薺 鈴木 臣和

フレコンバッグに入れられた汚染土のところかまわず置かれたさまを「難民のごとき」と形容したもの。行き処、置きどころ、引き取り手が決まらないかなしさをこめて。黒い袋の陰で花を付けるなずなの可憐さに涙する。解決などあり得ない原発事故災害処理の困難さをぶつけている。

海底に流れをるらん卒業歌 小原真理子

〈ゆつくりと沖の巨船や卒業歌〉（川村五子）、〈深海のこだま潜むや山ざくら〉（原田宏子）の両句のイメージとも重

今月の秀句

芽吹く木を称ふる深き根の力 平山 広子

空へ向って芽吹く木。それを称えるのが地中深く伸びる根だという。暗い地の底へ根を張り伸ばす根の張り合いは、芽吹きやさかななこと。芽吹きが見えない根はそれを信じて、いっそう芽吹きがさかになるように力を入れるというのである。無償の愛とでもいいたい力。子育ての母の愛や、世の中にはこんな生き方をする人がいる。作者はクリスチャン。

栄螺ほど立派な御殿に住んでいる貝はない。人間の豪邸であらうと、精巧な栄螺の邸宅にはかなわない。壺焼と称し、じぶじぶ焼かれるかなしきよ。七輪の火に載せられた金網の上で焼かれるさまは、残酷極まりない。人間どもは無慈悲。焼かれる宿命を「頂き」と甘受せざるを得ない栄螺。噫無情。

夜桜に負けないように厚化粧 島田 篤夫

夜桜見物の支度には凝る。資生堂の白粉を今宵ばかりは女形ほど顔面にばたばた叩きつけて、自肌が寸分も見えないように取りつくろって出かける。桜は口実。「今宵逢ふひと皆うつくしき」仲間に負けないように。川柳と俳句との境がおもしろい。「厚化粧」の皮肉がぼったりとおかしい。

急カーブ手は春キャベツ押えつけ 市原 啓子

自転車か自動車で急カーブを曲る折のさまか。前に付けた荷物籠の中の春キャベツがとび出さないように押えつけて。こんなささやかなことが俳句になる。俳句百面相。これもよい。

ふらここを下りて少女は奪衣婆に 佐藤 きく

少女期はぶらんこの上でゆられて過すごとし。たのしく、夢多く、うつくしきときは短し。ぶらんこを下りると途端に肋骨をあらわに、白髪を振り乱し、十王堂に納まる三途の川の奪衣婆となる。有無をいわさず、ぶらんこ愛用の少女から

なる。海底の学校（墓場とは思いたくない）でも卒業式が行われ、卒業歌が唱われている。唱えない者には卒業歌を流して。なんとも切ない、せめてもの親心からの想像句。

叩きつけ旨み閉ぢ込む味噌造り 小野 文雄

味噌造りは四角い味噌玉に仕上げるために床に味噌の塊りを叩きつける。叩きつけることで手垢も水漬もつばきも鼻糞も混り、味噌の「旨味」がকাশし出される。「味噌糞」の味。作者は塩尻の鄙の和尚さま。一視同仁の心からの作。

我が顔を伸びきらせたり石鹼玉 名取 大輔

三十五歳の作者。顔に近々と石鹼玉をふくらます。頬いっぱい息をためて、頬をふくらめると同時に石鹼玉も顔のようにふくらむ。わが息が石鹼玉に注入されるのは、顔が伸びきったようだという充実感になろう。一つのこと執着する一瞬こそ青春。いい顔が見える。

岳集推薦候補作を掲げておく。

後出しのじやんけんのやう紅梅は 宮坂やよい
掌を重ね円陣卒業子 田中 優子
湧水を飲む万緑に負けぬやう 小松皋左衽子
花吹雪我一塊の土人形 高松 正明
猫の恋朝からさがしものばかり 一條 友子